

琉球大学学術リポジトリ

子どものいたずらについての探索的研究
ーいたずらから見る子どもの発達、保育者の対応を
中心にー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2012-12-27 キーワード (Ja): いたずら, 新任保育者と中堅・ベテラン保育者, 面接法 キーワード (En): mischief, novices and medium-experienced veteran in preschool teachers, interview method 作成者: 中尾, 達馬, NAKAO, Tatsuma メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25597

子どものいたずらについての探索的研究¹

——いたずらから見る子どもの発達，保育者の対応を中心に——

中尾達馬（琉球大学教育学部）²

An exploratory study of mischief: Do we recognize the development of children through mischief, and what do preschool teachers behave in that situation?

Tatsuma NAKAO (Faculty of Education, University of the Ryukyus)

本研究の目的は、保育者へのインタビューを通して、子どものいたずらの諸相を明らかにすることであった。調査対象者は、保育者42名（新任保育者23名，中堅・ベテラン保育者19名）であった。得られた回答に対して内容分析を行った結果、(1)子どもが行ういたずら，保育者が子どもに対して仕掛けるいたずらは、「物」というよりは「人」に対して行われることが多いこと，(2)保育者は，子どもがいたずらをする理由を，「いたずらは対人的に開かれたもの」と「いたずらは内からわき出てくるもの」という視点から捉えていること，(3)保育者のいたずらへの対応は，大別すると，「教育的指導」と「ノってあげる」に分類できること，(4)加齢に伴って，子どもは，見通しをもって，複数で協力していたずらを行うようになること，(5)中堅・ベテラン保育者は，新任保育者に比べて，子どものいたずらに対して寛容であること，が示唆された。議論は，子どもの発達との関連性，保育者の対応という視点から，いたずらには何らかの意義があるのかという点について行った。

キーワード：いたずら，新任保育者と中堅・ベテラン保育者，面接法

The purpose of this study was to reveal the various features of mischief. We administrated the individual or group interviews to 42 preschool teachers (23 novices and 19 medium-experience / veteran). Main findings were as follows: (1) Many children and preschool teachers got into mischief to the "person" rather than "things". (2) Preschool teachers considered the reasons why children cause the mischief in the perspectives of "Mischief was not intrapersonal things but interpersonal ones" and "The origins of mischief were children's curiosities". (3) The responses of preschool teachers to the mischief were roughly categorized as "Educational guidance" and "Taking enjoyment in mischief with children". (4) As becoming older, children were to get into mischief with expectation of causes and effects, and in cooperating with their friends. (5) Medium-experience / veteran preschool teachers forgave children's mischief than novices. The significance of the mischief was discussed from the perspectives of the relation between mischief and the development of children, and the responses of preschool teachers to the mischief.

Key words:mischief, novices and medium-experienced veteran in preschool teachers, interview method

¹ 本研究の一部は，2009年に九州心理学会第70回大会（佐賀大学）で発表を行いました。

² 本研究は，著者指導のもとで，貞弘梨衣・清水かおり・渡井 恵の3名が平成20年度に山口芸術短期大学「こども総合研究」（卒業研究）において行った調査のデータを再分析したものです。また，本研究を実施するに当たりご協力くださいました保育者の皆様方に心より感謝を申し上げます。

はじめに

「今までで、一番びっくりしたいたずらは何ですか」と問われたときに、あなたなら何と答えるだろうか。以下の事例は、ある園長先生から聞いた話である。

3歳になる子どもが、いつもお母さんをおもちゃのトカゲ（ビニール製）でおどかすらしい（e.g. うわってする。お風呂の中でも、トカゲを見せて、ほれほれ）。お母さんは、あまりに腹が立つので、ある日の夕ご飯に、そのトカゲ（おもちゃ）を天ぷらにして出した。もちろん、子どもは知らずに食べたから、…「がっし」、天ぷらの中からトカゲが出てきた。お母さんはこのことを自分の母親（おばあちゃん）に報告。2人で大笑いしたらしい。

上記の話の中には、いたずらのエッセンスが多く含まれている。たとえば、子どもは、相手を選んで、しかも、親しい相手にいたずらをしたがる。いたずらをされた大人は、同じ目線、同じ立場から、本気で仕返しをしている。双方のいたずらの結果は、決してほめられたものではないが、多分にユーモアの要素を含んでおり、人の笑いを誘う。いたずらは、個人の中に閉じているというよりは開かれており、他者と共有してはじめて、その真価を発揮する。

問題と目的

「いたずら」とは、広辞苑（新村，2008）によれば、「無益，無用，役に立たないつまらないこと＝徒」や「無益でわるいたわむれ，わるふざけ＝悪戯」を意味する。そして、いたずらには、「成功と失敗」という結果が予想され、思考力や知的工夫を働かせなければならぬため、「遊び」とは少し違った発達の要因を含んでいる（近藤，1989）。つまり、いたずらには、「当たりと外れ」があり、「スリル」がある。そして、スリルを感じているときのドキドキ感、ワクワク感、ゾクゾク感によって、知的活動が促進される。また、大人は、その結果だけではなく、動機、知的能力（工夫）といった要素をも含めて、全体的・総合的にいたずらに対して評価を行っている。

子どものいたずらは重大な事故へとつながりかねないため、大人は表だってそれを支持することはできない。だが、ある程度、いたずらを許容しながら、他者の立場やその心情などを認識させていくことは、教育の一要素として非常に重要である（加用，1989）。

幼稚園で約30時間の観察を行った小林（1996）によれば、(1)子どもは数多くのいたずらを行っており（1時間平均24.2ケース）、(2)年少児のいたずらでは「外界の探索」という意味合いが強いが、年中児・年長児のいたずらでは、「他の人から注意を向けられたい」という意味合いが強くなっていた。そして、(3)子どものいたずらは、主に「人」に対して行われていた（「もの」ではなく「人」に対して行われたいたずらは、3歳児では約60%、4歳児では約80%、5歳児では約80%であった）。

だが、子どものいたずらについての実証的研究は非常に数少ないため、親や保育者といった大人が子どものいたずらをどのように捉えているのか、ということについての分析は、ほとんど行われていない（cf. 小林，1996）。育児支援や保育者養成において、子どもへの理解を深め、子どもとの関わりをより楽しいものとするためには、この点について検討することが必要不可欠であろう。

そこで本研究では、保育者に対して子どものいたずらに関するインタビューを行い、新任保育者と中堅・ベテラン保育者のいたずらに対する捉え方の違いを探索的に検討する。そして、いたずらを通して見る子どもの発達、およびそれに対する保育者の対応など、いたずらの諸相を明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者 調査対象者は、新任保育者23名（職歴：7ヶ月－6年）、中堅・ベテラン保育者19名（職歴：7年－44年、うち、2名は保育所で園長経験のある大学教員、1名は保育職経験のある大学院生）の計42名であった。なお、男性は1名、女性は41名であった。

インタビュー内容および手続き インタビューアーは著者を含む3名であり（1名が質問者、そして3名全員が記録者）、インタビューは個別あるいは集団（2－7名）形式で実施した。具体的

には、以下の質問を、私立幼稚園3箇所、公立保育所2箇所、私立保育所2箇所、また、この他にも、A短期大学の学園祭を訪れていた卒業生（その多くは新任保育者）や保育所で園長経験のある大学教員に対して行った（インタビュー回数は計16回）。所要時間は、30分～1時間であった。

1. 今までで一番驚いた（印象に残った）いたずらは何ですか？
2. なぜ、子どもはいたずらをすると思いますか？
3. どんな子どもがいたずらをよくすると思いますか？
4. 子どもがいたずらをしたときの対応はどうかしていますか？また、先生方が逆にいたずらをしかけることはありますか？
5. どの年齢（年少・年中・年長）が、一番いたずらが多いですか？また、年齢によってどんな特徴がありますか？
6. いたずらと悪ふざけの違いは何だと思えますか？
7. 子どものいたずら心を保育に活用することはできると思えますか？また、それはどんな保育だと思えますか？
8. 保育職の職歴は何年ですか？

インタビュー内容は、3名のインタビューアー全員がその場でメモをとり、その後、情報を集約した。以下では、最小公倍数的に、3名のメモに1度以上登場した回答について分析を行う。

結果

インタビューを通して得られた回答は、著者がKJ法（川喜田、1967）に準ずる方法で分類を行った。すなわち、回答を、意味のまとまり毎に分割し、その頻度を計算した。なお、本研究では、個別インタビューと集団インタビューを併用したため、以下に記す頻度やパーセンテージは、回答者

数（人数）ではなく、回答された事例数である。

1. 一番驚いた（印象に残った）いたずら

小林（1996）に基づき、「対人」（人に対して）、「対持ち物」（知っている相手の持ち物に対して）、「対物」（ものに対して）、「対生物」（動植物に対して）という4つのカテゴリーを設定し、それぞれの事例数を算出した（Table 1、付録のTable A）。その結果、新任保育者も中堅・ベテラン保育者も、小林（1996）と同様に、対人的ないたずらが印象に残っているようであった（「対人」と「対持ち物」を合わせると全体の約70%にもよる）。

2. なぜいたずらをするのか

「なぜいたずらをするのか」を「いたずらには、対人的に開かれたものであるという特徴があるから」（Table 2）と「いたずらには、内からわき出てくるという特徴があるから」（Table 3）に大別し、それぞれの事例数を算出した。その結果、新任保育者では、全体の約70%が「いたずらは対人的に開かれたもの」の事例であったが、中堅・ベテラン保育者では、「いたずらは対人的に開かれたもの」の事例が約半数、「いたずらは内からわき出てくるもの」の事例が残りの約半数であった。したがって、新任保育者は、「なぜ子どもはいたずらをするのか」を、主に、2者関係の視点（ie、いたずらは対人的に開かれたもの）として捉えがちであるが、中堅・ベテランは、この2者関係の視点だけでなく、いたずらを子どもの内側からわき出てくる好奇心・探求心の表れであるともみしていることが示唆された。

3. どんな子どもがいたずらをよくするのか

保育者は、いたずらをよくする子どもは、主に、「元気な子」、「不安定な子」、「構ってほしい子」

Table 1 「一番驚いた（印象に残った）いたずら」の事例数（%）¹⁾

	対人	対持ち物	対物	対生物	合計
新任	33 (51.6%)	11 (17.2%)	17 (26.6%)	3 (4.7%)	64
中堅・ベテラン	21 (51.2%)	9 (22.0%)	9 (22.0%)	2 (4.9%)	41
合計	54 (51.4%)	20 (19.0%)	26 (24.8%)	5 (4.8%)	105

¹⁾各カテゴリーの回答例：「対人」＝落とし穴、鍵閉め、「対持ち物」＝靴隠し、「対物」＝落書き、「対生物」＝木の上の鳥小屋を棒で突く。これらの事例の詳細については、付録のTable Aを参照のこと。

Table 2 「なぜいたずらをするのか」における「いたずらは対人的に開かれたもの」の回答数 (%)¹⁾

	気を 引きたい	一緒に楽 しみたい	自己顕示	不満・訴え	この人な ら大丈夫	真似	友達の様子を 面白がっている	小計
新任	6(35.3%)	2(11.8%)	0	2(11.8%)	1(5.9%)	1(5.9%)	0	12(70.6%)
中堅・ベテラン	8(25.0%)	4(12.5%)	2(6.3%)	0	0	0	1(3.1%)	15(46.9%)
合計	14(28.6%)	6(12.2%)	2(4.1%)	2(4.1%)	1(2.0%)	1(2.0%)	1(2.0%)	27(55.1%)

¹⁾総事例数は 49 (新任 = 17, 中堅・ベテラン = 32) であった。各カテゴリーの回答例は以下の通り：「気を引きたい」=構ってもらいたいから、「一緒に楽しみたい」=コミュニケーション (どんな反応をするのかな, どのくらい驚くのかな), 「自己顕示」=自分はこんないたずらができる, というところを友達に見せたい, 「不満・訴え」=何か訴えたいことがあるから, 「この人なら大丈夫」=この人ならやっても怒られないだろうし, 怒っても怖くないと思っているから, 「真似」=下の子が上の子の真似をする, 「友達の様子を面白がっている」=友達が困って探し回っている様子を面白がっている。

Table 3 「なぜいたずらをするのか」における「いたずらは内からわきでてくるもの」の回答数 (%)¹⁾

	興味関心	本能的・衝動的に	ワクワク	ノリ	遊びの延長	小計
新任	2(11.8%)	1(5.9%)	0	1(5.9%)	1(5.9%)	5(29.4%)
中堅・ベテラン	8(25.0%)	5(15.6%)	2(6.3%)	1(3.1%)	1(3.1%)	17(53.1%)
合計	10(20.4%)	6(12.2%)	2(4.1%)	2(4.1%)	2(4.1%)	22(44.9%)

¹⁾総事例数は 49 (新任 = 17, 中堅・ベテラン = 32) であった。各カテゴリーの回答例は以下の通り：「興味関心」=やってみようという好奇心, 「本能的・衝動的に」=衝動的に, これをやってみたらどうなるのだろうという思いから, 「ワクワク」=スリル感を味わいたい, 「ノリ」=結果を考えずに, そのときのノリや勢いで, 「遊びの延長」=大きい子になると, 遊び・ゲーム感覚。

であると考えていた (Table 4)。また, 新任保育者は, いたずらをよくする子どもを, 「元気な子」あるいは「不安定な子」と捉えていたが, 中堅・ベテラン保育者は, 「元気な子」, 「構ってほしい子」がいたずらをよくすると考えていた。したがって, 保育者は, 新任のときは, いたずらっ子をポジティブ・ネガティブの両側面から捉えているが, 職歴を重ねるにつれて, 子どもには, いたずらをするくらい元気・余裕が必要であると考えるようになるのかもしれない。

4-1. 保育者のいたずらへの対応

保育者のいたずらへの対応は, 大きく, 「教育的指導」と「ノってあげる」に分類することがで

きた (Table 5)。このうち, 「教育的指導」の具体例を紹介すると, 次のようになる。すなわち, 危険なことは注意する (ケガなどがないように), 「なぜしたのか・何をしたかったのか」という理由を聞く, 相手の気持ちを考えさせる, ものの使い方や大切さを教える, 全体に対して話をする, 命の大切さを指導する (生き物が絡む場合), 後始末を子どもと一緒にする, 先生の気持ちを伝える, などであった。また, 新任保育者に特徴的な対応は「怒ってみせる」, 中堅・ベテラン保育者に特徴的な対応は「認めてあげる」なのかもしれない (Table 5)。特に, 「怒ってみせる」については, 中堅・ベテラン保育者が怒ると, いたずらをした子どもは萎縮してしまうかもしれないが,

Table 4 「どんな子どもがいたずらをよくするのか」の回答数 (%)

	元気な子	不安定な子	構って ほしい子	賢い子	ひょうき んな子	他の子がして いるからする子	どんな 子も	その他 ¹⁾	合計
新任	5(25.0%)	6(30.0%)	1(5.0%)	2(10.0%)	0	2(10.0%)	2(10.0%)	2(10.0%)	20
中堅・ベテラン	13(44.8%)	1(3.4%)	5(17.2%)	2(6.9%)	3(10.3%)	1(3.4%)	1(3.4%)	3(10.3%)	29
合計	18(36.7%)	7(14.3%)	6(12.2%)	4(8.2%)	3(6.1%)	3(6.1%)	3(6.1%)	5(10.2%)	49

¹⁾「その他」の内訳は, 以下の通り：自由奔放な子 (中堅・ベテラン), 後先考えない子 (中堅・ベテラン), 余裕のある子 (中堅・ベテラン), いたずらは遊びと違うということを教えてもらっていない子 (新任), おじいちゃんっ子やおばあちゃんっ子 (新任)。

Table 5 「保育者のいたずらへの対応」の回答数 (%)¹⁾

	教育的指導	ノってあげる	怒ってみせる	保護者と 連絡を取る	認めてあげる	その他	合計
新任	17(54.8%)	5(16.1%)	6(19.4%)	2(6.5%)	0	1(3.2%)	31
中堅・ベテラン	20(62.5%)	6(18.8%)	0	1(3.1%)	2(6.3%)	3(9.4%)	32
合計	37(58.7%)	11(17.5%)	6(9.5%)	3(4.8%)	2(3.2%)	4(6.3%)	63

¹⁾各カテゴリーの回答例：「教育的指導」＝危険なことは注意する、相手の気持ちを考えさせる、理由を聞く、命の大切さを伝える、「怒ってみせる」＝わざと怒っているという態度を示す、「認めてあげる」＝子どもの工夫やバイタリティを認めてあげる、「その他」＝怒る前に一呼吸おいて対応する（中堅・ベテラン）、など。

年若い新任保育者は怒ってみせることで、子どもをあまり萎縮させることなく保育者の真剣さを伝えることが可能であるため、この方法は若さを活かした指導法であるといえるのかもしれない。

4-2. 保育者が仕掛けるいたずら

「先生方が逆にいたずらをしかけることはありますか？」については、「1. 一番驚いた（印象に残った）いたずら」と同様のカテゴリーを設定し、分析を行った（Table 6, 付録の Table B）。その結果、新任保育者、中堅・ベテラン保育者共に、対人的いたずらを子どもたちに仕掛けているようであった（「対人」と「対持ち物」を合わせると全体の約 90%にものぼる）。

また、その内容については、保育者は、主に、「わざと」、「じゃれる」、「不思議」という内容のいたずらを行い、新任保育者は、それに加えて、「怖い」という内容のいたずらを行うことが示唆された（Table 7, 付録の Table B）。新任保育者は、子どもからいたずらをされやすいため、日頃の仕返

しという意味合いもあるだろうが、その一方で、中堅・ベテラン保育者のように、第 3 者的にいたずらに対応するというよりは、当事者として同じ目線・同じ立場に立って、いたずらを仕返しているというようにも解釈できよう。

5. いたずらから見る子どもの発達

いたずらから見る子どもの発達については、新任保育者と中堅・ベテラン保育者との間に、大きな違いは見られなかった。そこで、以下では、全体的な傾向について述べる。

「どの年齢（年少・年中・年長）が、一番いたずらが多いですか？」については、「変わらない」という回答が頻度 5 で最も多く、次いで、「年少児が一番多い」という回答が 4、「年中組が一番多い」という回答は 2、「年長児が一番多い」という回答は 2 であった。したがって、回答がばらついていること、一番頻度が多い回答が「変わらない」であるということから、子どもは、どの年齢段階においても、同じくらいの頻度で数多くの

Table 6 「保育者が仕掛けるいたずら」の事例数 1 (%)¹⁾

	対人	対持ち物	対物	なし	合計
新任	14(73.7%)	3(15.8%)	2(10.5%)	0	19
中堅・ベテラン	21(80.8%)	3(11.5%)	1(3.8%)	1(3.8%)	26
合計	35(77.8%)	6(13.3%)	3(6.7%)	1(2.2%)	45

¹⁾各カテゴリーの回答例の詳細については、付録の Table B を参照のこと。

Table 7 「保育者が仕掛けるいたずら」の事例数 2 (%)¹⁾

	わざと	じゃれる	不思議	怖い	なし	合計
新任	6(31.6%)	4(21.1%)	4(21.1%)	5(26.3%)	0	19
中堅・ベテラン	8(30.8%)	7(26.9%)	8(30.8%)	2(7.7%)	1(3.8%)	26
合計	14(31.1%)	11(24.4%)	12(26.7%)	7(15.6%)	1(2.2%)	45

¹⁾各カテゴリーの回答例の詳細については、付録の Table B を参照のこと。

いたずらを行うことが示唆されたといえよう。

「年齢によってどんな特徴がありますか？」については、インタビューを行った 16 箇所のうち 14 箇所において、加齢に伴い、いたずらが高度になるという回答があった。その内容を整理すると、次のようになる (Table 8, 付録の Table C)。すなわち、年少児のいたずらは、よく分からずに行われ、また、かわいらしいものであること、年中児のいたずらは、質は年少児と年長児の間であり、いわゆる「いたずら」の萌芽が見られること、年長児のいたずらは、工夫されており内容が高度であること (i.e., 見通しを持って、複数で協力して行われること) が示唆された。なお、加齢

Table 8 ある園における「靴・スリッパ隠し」の事例¹⁾

内容	年少児：隠しきれていなくてバレバレだけど、隠した子どもは満足気。
	年中児：いつも通るところの「死角」に物を隠す。
	年長児：賢いいたずら。隠し場所が園全体。絶対に見つからない場所や入ってはいけないうところに隠す。
単 独 vs. 複 数	年少児：みんなで一人の子がやったことを後追いつする。そして、みんなで隠したぞ！！という感じ。
	年中児：隠してしれーっと戻ってくる (3～4人)。
	年長児：単独である場合もあるが、アイデアを出し合って複数である場合が多い。いたずらに参加せずに見ていた子たちは、隠し場所を知っているが、保育者にはその隠し場所を教えるはくれない。

¹⁾この他の事例は、Table C を参照のこと。

Table 9 「いたずらと悪ふざけの違い」の回答数 (%)¹⁾

	悪ふざけには ネガティブな 特徴が多い	いたずらは 必ずしもネガ ティブではない	いたずら では内省が 働く	悪ふざけ の諸特徴	年齢に よって 異なる	子どもの 視点からは 区別はない	種々の 判断基準	その他	合計
新任	5 (19.2%)	3 (11.5%)	4 (15.4%)	5 (19.2%)	4 (15.4%)	2 (7.7%)	2 (7.7%)	1 (3.8%)	26
中堅・ベテラン	11 (39.3%)	5 (17.9%)	3 (10.7%)	2 (7.1%)	1 (3.6%)	2 (7.1%)	3 (10.7%)	1 (3.6%)	28
合計	16 (29.6%)	8 (14.8%)	7 (13.0%)	7 (13.0%)	5 (9.3%)	4 (7.4%)	5 (9.3%)	2 (3.7%)	54

¹⁾各カテゴリーの回答例：「悪ふざけにはネガティブな特徴が多い」＝悪ふざけは度が過ぎる、人に嫌な思いをさせる、カチーン！とくる、「いたずらは必ずしもネガティブではない」＝いたずらは一過性のも (誰も通る道)、いたずらは可愛い・許せる・お茶目な感じ、「いたずらでは内省が働く」＝いたずらには意図がある、いたずらは反省がつく、「悪ふざけの諸特徴」＝騒いでいたノリが延長して悪ふざけに発展、悪ふざけは伝染する、「年齢によって異なる」＝悪ふざけは年長が多い、「子どもの視点からは区別はない」＝子どもには両者の境目はない (大人のとらえ方による)、「種々の判断基準」＝力加減が違う、表情が違う、「その他」＝いたずらと悪ふざけは一緒、いたずらは自分が楽しむためにする。

に伴い複数人で何らかの活動を行うようになるという傾向は、幼稚園児の虫捕り遊びにおいても確認されている。年少児は単独で虫捕り遊びを行うこともあるが、年長児は、必ず 2 人以上の集団で虫取り遊びを行うようである (藤崎, 2002)。

6. いたずらと悪ふざけの違い

保育者は、悪ふざけには、いたずらに比べて、ネガティブな特徴が多いこと、いたずらは許容できる場合も多いこと、年長児になるにつれて悪ふざけは増えるが、もしかすると、子どもの視点からは、いたずらと悪ふざけの明確な違いはないかもしれないと考えていることが示唆された (Table 9)。ある保育者が述べていたが、「いたずらと悪ふざけの違い」は、大人側からすると、もしかしたら、「いたずらはかわいいもの」、「悪ふざけはカチーンとくるもの」という区分別が感覚的には分かりやすいかもしれない。

7. 子どものいたずら心を活用した保育とは？

保育者は、子どものいたずら心をも、主に、「発散」、「保育者が捉え方を変える」、「設定保育へ取り入れる」、「遊びにもっていく」、「指導の機会とする」、「自らを見直す機会」として活用していた (Table 10, 付録の Table D)。また、子どものいたずら心を活用した保育については、新任保育者には「発散」という特徴が、中堅・ベテラン保育者には、「保育者が捉え方を変える」、「設定保育への取り入れ」という特徴があるのかもしれない (Table 10)。

Table 10 「子どものいたずら心を活用した保育」の回答数 (%)¹⁾

	発散	保育者が 捉え方を 変える	設定保育への 取り入れ	遊びに もっていく	指導の 機会	自らを 見直す機会	一緒に 考える	その他	合計
新任	7(38.9%)	0	0	3(16.7%)	3(16.7%)	2(11.1%)	1(5.6%)	2(11.1%)	18
中堅・ベテラン	2(9.1%)	8(36.4%)	5(22.7%)	2(9.1%)	1(4.5%)	1(4.5%)	1(4.5%)	2(9.1%)	22
合計	9(22.5%)	8(20.0%)	5(12.5%)	5(12.5%)	4(10.0%)	3(7.5%)	2(5.0%)	4(10.0%)	40

¹⁾各カテゴリーの回答例の詳細については、付録の Table D を参照のこと。

考察

以上の結果を整理すると、次のようになる。すなわち、(1)いたずらは、悪ふざけに比べると、保育者に許容されるものであるが、その内容は、「対人」、「対持ち物」、「対物」、「対生物」に大別できる。そして、子どもが行ういたずらおよび保育者が仕掛けるいたずらは、「人」に対して行われる場合が多い。(2)保育者は、子どもがいたずらをする理由を、「いたずらは対人的に開かれたもの」と「いたずらは内からわき出てくるもの」という視点から捉えていた。(3)そのため、保育者は、いたずらをする子ども像を、「元気な子」、「不安定な子」、「構ってほしい子」として捉えていた。また、(4)保育者のいたずらへの対応は、大きく、「教育的指導」と「ノってあげる」に分類することができた。そして、保育者は、子どものいたずら心を、主に、「発散」、「保育者が捉え方を変える」、「設定保育へ取り入れる」、「遊びにもっていく」、「指導の機会とする」、「自らを見直す機会」として活用していた。(5)いたずらから見えてくる子どもの発達については、量的側面、すなわち、いたずらの頻度という点においては、子どもの年齢段階による違いは見出されなかった。しかし、質的側面については、加齢に伴って、いたずらがより高度になる (i.e., いたずらが、見通しをもって、複数で協力して行われるようになる) ということが示唆された。

新任保育者と中堅・ベテラン保育者の子どものいたずらに関する認識の違いについては、以下のような結果を得た。すなわち、(1)新任保育者は、「子どもはなぜいたずらをするのか」を、主に、2者関係の視点 (i.e., いたずらは、対人的に開かれたもの) として捉えがちであるが、中堅・ベテラン保育者は、この2者関係の視点だけでなく、いたずらを子どもの内側からわき出てくる好奇心・

探求心の表れであるとみなしていた。(2)新任保育者は、いたずらっ子をポジティブ・ネガティブの両側面から捉えているが (i.e., 元気な子、不安定な子)、中堅・ベテラン保育者は、いたずらっ子を、いたずらをするくらいの元気・余裕がある子どもと見なしていた。(3)新任保育者のいたずらに対する特徴的な対応は「怒ってみせる」であり、中堅・ベテラン保育者に特徴的な対応は「認めてあげる」であった。子どものいたずら心の保育への活用という点では、新任保育者は「発散」という形で、中堅・ベテラン保育者は「保育者が捉え方を変える」、「設定保育への取り入れ」という形で活用するという点に、それぞれの特徴があることが示唆された。したがって、中堅・ベテラン保育者は、新任保育者に比べて、いたずらに対してより寛容であるといえよう。

いたずらと発達 子どもたちは、親しさの表現として、また、一時的に笑いをこらえて、後で大笑いしたいために、いたずらを行う。言い換えると、いたずらを通して、相手を見極めるということ、TPO (Time [時間], Place [場所], Occasion [場合]) に応じた行動の仕方、そして、待つということを学んでいく (加用, 1989)。

大人は、子どもたちのおどけやふざけの中に、彼(女)らの自発性や創造性の一端を垣間見ることができる (大里, 2007)。たとえば、子どもは、2歳半頃から「ウンチ」、「オシッコ」などと言ってはゲラゲラ笑うことが多くなるが、6歳頃からは、「ウンチ」、「オシッコ」と言って笑うことはつまらなくなり、もっと複雑なおどけ・ふざけへと発展していく。また、乳児期は、子どもがいたずらをするというよりは、「大人がいたずらを仕掛ける」時期であるが、幼児期になると、今度は、逆に、子どもがいたずらを仕掛けるようになる (加用, 1989)。しかも、その仕掛け方は、「こっそり」

であり、子どもは、一時的に笑いをこらえて、後で一緒に大笑いをしたいためにいたずらを行うようになる。

就学前後から児童期前期にかけては、「他者に迷惑が及ぶかどうか」という点から、探索活動といたずらの境界がおおよそどの辺にあるのかという見当がつくようになる(近藤, 1989)。ただし、この時期の子どものいたずらには、「手探り」の側面があり、(大人側からすれば)ときに突拍子もない行動を行うこともある(加用, 1989)。

そして、子どものいたずらは、たとえ大人側から見るといたずらとラベリングされる行動であったとしても、実は、子ども側からすれば、いたずらをしようとして行っているのではない可能性が高い(波多野, 1991)。たとえば、いたずらは、「小さい子どもが庭の草木をいじって、それから引き抜く」というものであり、「あやまち」とは、「キャッチボールをしていて窓ガラスを割ったり、台所のお手伝いをしていて、お茶碗を割ったりする」ことである。ピアジェの道徳性判断の課題³の例からも分かるように、子どもは結果論者であるので、全てのことは、基本的に結果(被害の大きさ)から判断しがちである。そのため、子どもにとっては、故意かどうかということは、分かりづらく、なぜ野原の草はむしってよくて、よその家の庭の草はむしってはいけないのか、を区別することは難しい。

その後の発達段階については、児童期のいたずらは、ものに働きかけることによって、ものの性質を知ることには意義があるが、青年期のいたずらは、他人に働きかけることによって、他人の心の動きを知ることには意義があるのかもしれない(波多野, 1991)。先の「となりの家の庭の草花をむしる」という例について述べるならば、小さい子

どもの場合には、草花がきれいだからという理由で引き抜いてしまうのだが、青年はその家の人(eg. その家の親父)を怒らせることが目的となる。なお、不思議な現象として、波多野(1991)は、高校3年生は教員に対していたずらをする人が多いが、大学1年生は、教員に対していたずらをする人が少ないということを指摘している。

大人側の対応 子どものいたずらは、子どもならではの内からわき出てくる興味関心や好奇心の表れである場合も多い。そのため、保育者は、子どもの好奇心を認めてあげたいという気持ちと、表立っては教育的指導をしなければならないというジレンマに陥る。このジレンマを、ある中堅・ベテラン保育者は、「大人の靴を履いて子どもが逃げる」といういたずらを例にあげ、次のように述べた。

子どもが保育者の靴を履いて逃げ回るといういたずらをした場合、保育者から見れば、子どもがぶかぶかの大きな靴を履いている姿は微笑ましく、また可愛く思える。だが、実は、ある子どもが、その子の友達の親の靴を履いてどこかにいってしまったということがあった。そのとき、その親御さんは、自分の靴がなくなったと思って、とても困った様子だった。もしかしたら、急いで病院に行きたかったかもしれない。

このように、同じ行為でも、その場の状況によっては、可愛いいたずらで済まない場合もある。つまり、いたずらは許容してあげたいが、子どもが第3者に対していたずらをした場合には困ることもある。もっとも、その第3者も、子どもからすれば知っている人(先ほどの例の場合は、友達の親)であるので、

³ ピアジェの道徳性判断の課題では、次のような2つの話を作って、これを様々な年齢の子どもたちに聞かせる(波多野, 1991, pp. 105-106)。

「ある子どもが、母親の留守中に画を書きたくなくて、父親の机に行き、インキ壺をあけて、ペンをつけたところが、そのインキが机に落ちてテーブルクロスに小さなシミができた」

「ある子どもが父の留守中に、机のそばへ行き、そのインキ壺がふたがとれているままになっているのを見て、ふたをしてあげましようと思って、フタをしたところが、誤ってインキ壺をひっくり返して、テーブルクロスに大きなシミを作った」

そして、子どもたちに「この2人の子どものうち、どちらが余計に罰せられなければならないのだろうか」という質問を行う。子どもは、8歳から9歳を境に、「結果論者」から「動機論者」へと移行する。つまり、結果(被害の大きさ)重視の道徳的判断から、動機重視(なぜそのような行為をしたのか)の道徳的判断へと移行する。

子どもにとっては、なぜ、保育者にはいたずらをしてよい場合があって、友達の親という同じ知っている人に対しては、いたずらをしてはいけないということは分かりにくい。そのため、保育者は一概に「いたずらをやってもいいよ」ということはできない。

このことについて、加用（1989）は、大人側の対応としては、白黒をはっきりつけるというよりは、あえて両方の色が混ざり合ったグレーとでもいうような対応を行うことが大切なかもしれないという提案を行っている。

（保育者集団は）表だっては禁止しつつも、陰では容認しつつそれとなく目を配っている職員集団でしょう。「悪さ」を見つけたら、まずもってとことん説教をしてあげなければなりません。その上で、「楽しかった？」と聞き、子どもたちの表情がパッと輝いて「うん」と答えたら、「でも、だめよ」と釘をさす。そのときの大人の表情が重要です。許していないように許しているような複雑な苦笑い。鏡に向かって練習してみたいものです（加用，1989，p. 36）。

子どもたちは、大人側のこのような複数の感情が交じり合った対応を受けて、問題には、「真面目に対処すべきこと」とそうでないものがあり、ときには「軽く受け流し、冗談にしてしまう機転」も大切であるということを手伝いでいくのであろう（加用，1989）。いずれにせよ、いたずらは子どもの特権の一つであるといえる（近藤，1989）。大人側は、いたずらを「頭から悪いこと」と決めつけるのではなく、その特権をある程度認めてあ

げることができるほどの、心のゆとりや遊び心を持ちたいものである。

今後の課題 いたずらは、過失、悪ふざけ、遊び、からかい、などと弁別が難しい側面がある（特に、子どもの視点に立つ場合は）。したがって、今後は、操作的定義やこれらの行動が生起する場面、そしてそれぞれの機能をより精査する必要がある（子どもの「からかい行動」についてのこの方向での試みは、牧・湯澤（2011）を参照にされたい）。

引用文献

- 藤崎亜由子（2002）. 幼稚園児の虫捕りあそびにおける諸活動の分類 日本保育学会第55回大会発表論文集，768-769.
- 波多野完治（1991）. 子どもの発達心理 国土社
- 川喜田二郎（1967）. 発想法——創造性開発のために—— 中央公論社
- 加用文男（1989）. 子どものあそびといたずら 全国保育団体連絡会（編）いたずら・冒険 草土文化 pp. 31-66.
- 小林未果（1996）. 幼児のいたずらに関する研究——その生起過程における人との関わりを中心にして—— 上越教育大学幼児教育研究，10，18-21.
- 近藤薫樹（1989）. 心の糧としてのいたずら・冒険 全国保育団体連絡会（編）いたずら・冒険 草土文化 pp. 11-21.
- 牧 亮太・湯澤正通（2011）. 幼児の遊びにおけるからかいの機能 保育学研究，49，146-156.
- 新村 出（編）（2008）. 広辞苑第六版 岩波書店
- 大里まり子（2007）. ふざけるにもワケがある 月刊 赤ちゃんとママ増刊号，42，4-9.

付録

Table A 「一番驚いた（印象に残った）いたずら」の具体例 1（新任＝新任保育者，中・ベ＝中堅・ベテラン保育者）

「対人」的いたずらの内容	報告者
<ul style="list-style-type: none"> ・「だーれだ？」と言ったので、振り向いたら違う子がいる（年長児がいたずらを仕組んで年少児に手伝わせる）。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・1・2歳児：「トイレに行くよ！！」と言うと、ベッドの下に逃げる。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・1・2歳：人の玩具を無理矢理とる。女兒も男児も関係なくする。女兒の方が強い気が… 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・2歳児：パンツをかぶる、かぶって踊る 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・3・5歳児：勝手に呼び捨てにする（たとえば、山田花子先生の場合、山田、山田花子ちゃん、山田さん）。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・3歳児：お片付けの時間に、人が片付けようとしているのをとって片付けようとする。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・4・5歳児：お化けや怖いものになったつもりで、おもちゃ倉庫に隠れている。そして、「わー」。大きい子は布をかぶって隠れていることも（怖いものになったつもり）。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・4・5歳児：玩具の虫やブロックなどを持ってきて「虫、虫！」。あるいは「見てー」、中身は違うもの。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・4・5歳児：かくれんぼで真剣に隠れていて、本当に見つからなかったことがある（園の外に出たかも？と本気で探したらしい…呼んでも出てこないし…）。こちらもしきそうだったが、向こうは向こうで「何で見つけてくれなかったん」と泣きそうだった。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・4・5歳児：物を手で隠して、「どっちに入っているのかな？」。実際には、入っているのに「入っていないよ」と言ったり、どちらにも入っていない。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・エプロンのポケットに本物の虫（ギンギラ虫や団子虫）を入れられた。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・2歳児：おしっこをして、パンツを脱いだままくっついてくる（わざと嫌がることをする）。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・お団子やケーキを作ってくれて、食べると、「毒入りでした〜」みたいな。友達にはしないのに、先生にはする。泥団子やケーキ、外で作ったもの。ままごとのケーキでも「食べて！食べて！」、食べると「毒でした〜」みたいな感じ。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・3・5歳児：お弁当袋を被る。一人が最初に被って、保育者がそれを見て「かわいい」と言う、他の子もみんな被りだした。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・4歳児：保育者の帽子を取る。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・年長児男児：ブラジャーの線をさわる、ひっぱる。ズボンをさげようとする。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・4歳児：エプロンのひもとる。（保育者の）パーカーのフードの中にブロックを入れる。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・ちょっかい（どの年齢の子もエプロンをひっぱったり、おしりをパンとたたいて、ぎゃはははと笑いながら逃げていく）。痛みが伴うのは年長児。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・トイレネタが多い。トイレのドアを叩いたり、など。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・ハサミを使っているときに、自分の前髪を切る（2歳児担任談）。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・ホースを使って、人に向けて水を飛ばす（花などに水をやっても反応がないので、人に向けてやった）。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・4・5歳児：トイレでうんこをした子が分かった、その子を見て笑う。「あいつ、うんこしよった〜」という感じ。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・隠れていて「どこにいるでしょう？」と子どもが言ってくる。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・2歳児、4歳児：トイレを覗いて「ウンチが出たの？」と言う。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・年長児：登園・降園時のバスの中で通せんぼをする。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・給食のときに、実習生が「よく食べたね」と言う、先生（実習生）、そうやって言うけど、本当はそんなこと思ってないんやろ？と言う。実習生に「先生、楽しくないけえあっち行って！！」と言う。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・胸をわしづかみ（どの年齢も）。一人がやるとみんながよってたかってする。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・年長児：戸を閉めて出られなくする。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・3歳児：はじめの頃は、ドアに鍵をかけておかなければならない。脱走して、遊具で遊ぶ。2・3ヶ月すると落ち着いてきて、座っていてくれるようになる。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・3歳児：部屋の鍵を閉める。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・2歳児：ベランダに出ているときに、部屋の鍵をかける。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・2歳児：他の先生がベランダに出たら鍵を閉める 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・2歳児：鍵を閉める。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・年長児：居残りの時に、先生と子どもが外に出たら鍵をかけて閉め出した。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・2歳児：入ったらいけないところに入る（本棚に入る。そして、本棚から抜けなくなった…）。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士で「大嫌い」と言い合う。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・2歳児：ロッカーの上に乗る。牛乳パックの敷居の上に乗る。怒られて痛い目にあうのに、繰り返す。 	新任

(次のページへ続く)

子どものいたずらについての探索的研究

「対人」的いたずらの内容	報告者
<ul style="list-style-type: none"> ・年中児：模倣遊びの時に、「蜂になりましょう!!」。子どもが蜂になりきって押しピンで先生の手を刺した。その子は「蜂やから刺すよ」と言った。 ・5歳児：本棚や遊具の高いところに登る。遊具の高いところにいっちゃだめといているのに、一番上(屋根)にいて、こっちを見て「えへへ」。 ・1歳児：居残りの時に、網戸から脱走する(何回も怒られる)。すると、目があったら脱走するようになった。ダメと言われたら笑いながら、いけないと分かっているけれど、網戸を開ける。 ・年中児が年長児をタイヤの中に閉じこめる(タイヤを重ねていく)。 ・年長児：にらめっこ「あっぷっぶ〜」の時に、パンツをおろす。 ・植木鉢の下にいるダンゴムシを捕まえて、遊び着のポケットにたくさん入れていた。それを保育者に「先生見てー」と言って持ってきた。 ・職員室にそっつと入ってきて、驚かされたことがある。 ・掃除道具箱の中に隠れていたが、誰も気がつかない。他の子に、先生を呼んできてもらう。ただし、戸棚が破れて、先生から怒られたらしい。 ・2歳児：追いかけられるのが楽しくて、わざと走って逃げる。 ・2歳児：かんだり、ひっかいたりする(障がいを持っている子も持っていない子も)。 ・年長児：砂場に穴を掘っていて、来て来て、ちょっとつまずいて、「うあ〜」。その穴を隠そうという雰囲気がないときも(穴が見えている)。隠しているときもあるが、どちらかというバレバレ。 ・年長児：積み木とかで道を作って、ちょっと落ちるようなところを作って、先生を呼んできて、そこを通らせる(年少組の〇〇先生を年長組に呼んできて、落とす)。こっちは分かっているけど、「何?」とか言って、バレバレだけどわざと驚かせてみせる。 ・年長組：積み木とかに隠れていて、「先生、きてきて」と言って、「ねえねえねえ」、「なににに」、「わー」と驚かそうとする。 ・散髪ごっこ。友達の髪を切ってあげていた(4歳児担任談) ・4・5歳児：外で遊んでいたら「目をつぶって!」と言ってきた。そして、落とし穴に落とされた。「わー」といってあげると喜ぶ。 ・3歳になってすぐ：ペンを持って自分の顔に落書きをする。 ・4・5歳児：浣腸をしってくる。 	<p>新任</p> <p>新任</p> <p>新任</p> <p>新任</p> <p>新任</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>新任</p> <p>新任</p>
「対持ち物」いたずらの内容	
<ul style="list-style-type: none"> ・0・1歳児：「にこっ」としながら、玩具をゴミ箱に捨てる。ゴミと玩具の区別が分かっていない。 ・1・2歳児：トイレで、友達のパンツを投げる。 ・2歳児：ミカンの皮を友達の牛乳に入れる ・2歳児、4歳児：トイレのスリッパを隠したり、トイレのドアを押さえて閉じ込めたりする。 ・3歳児：学期のはじめは、いたずらはあまり起こらない。他のクラスを見て思いつく。保育室は、2階で、「下に行って来るね」、「トイレに行ってくるね」…戻ってきたら靴(スリッパ)がなかった。 ・靴箱の中の靴の位置を移動させたり、他の場所へ隠す。 ・保育者の靴を履いたり、置く場所を変える。 ・友達の靴や持ち物を隠す。 ・大人(先生や友達のお母さん)の靴を履いて逃げる。 ・誰でもする(年少児も年長児もする)：先生とかかわりたくて、私たちがトイレに行っている間に、子どもがスリッパを履いたり、違うところに隠したり、でも後で教えてくれる。こだよ、みたいな。相手は、担任の先生でなくても先生であればよい(他のクラスの子どもにもされる)。先生たちの反応を見ていて、にこっとする。だから、犯人は直ぐに分かる。 ・保育者の靴に砂を入れて、埋める。 ・3歳児：先生が職員トイレに行き帰ってきたら、スリッパがない。保育室のおままごとセットの中に隠してあった。持って行った子どもたちも、どこに隠したのか分からなくなった(最終的には出てきた)。 ・4・5歳児：友だちの上靴やキーホルダーを隠す。 ・年中児：保育者のお弁当(おにぎり)をつまむ。 ・年中児：保育者の靴の中に入れていたハンドクリームを出して、2・3人で使い切った。 ・年長児：セミの抜け殻を先生の靴の中に入れる。 ・先生のギターをこっそりさわって、ジャン・ジャン。 ・年中児：子どもがお帳面(出席表)を入れる箱を、トイレの棚の所に持って行って置いた。先生が「どこに置いたっけー」といっても、真顔で「知らない」と答えていた(持って行ったこと自体を忘れていた)。お帳面が見つかるまでは、かなりの時間がかかった。 ・年長児：ある年長児には、嫌いな2歳児がいる。その子の傘を持ってきて、名前を書いてあるところを切って、「これとったけん、こっち(角の方)に来い」、と言っていたらしい。一方で、先生には、「これ、とれとったよ」と言うらしい。親が働きに出だしてからあれてきたそうだ。 	<p>新任</p> <p>新任</p> <p>新任</p> <p>新任</p> <p>新任</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>新任</p> <p>新任</p> <p>新任</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>新任</p> <p>新任</p>

(次のページへ続く)

「対持ち物」いたずらの内容	報告者
・ 他の子の給食を食べる	新任
「対物」的いたずらの内容	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1・2歳児：中身（ブロック）を全部出して、おもちゃ箱の中に入る。 ・ 1歳児：牛乳をついだ瞬間、ジャーとこぼす。もう一度ついだら飲む。食べたくない、ご飯をこぼす。 ・ 1歳児：いろいろなものを剥がそうとする（コンセントのカバー、シールなどをカリカリする）。 ・ 2歳児：トイレトペーパーを楽しみのでぐるぐると引っ張り出す。 ・ 2歳児：引き出しの中に並べてある紙おむつを全て出す。 ・ 2歳児：パンツを投げて遊ぶ。 ・ 1-3歳児：給食の時に嫌いなものをわざと床に落とす、牛乳をこぼす。 ・ 1-3歳児：落ちているものを拾い食いつく。足の裏のご飯粒をとって食べることもある。 ・ お帳面（出席簿）にシールを貼る。 ・ 2歳児：滑り台の上に置いてある靴を、滑らせる。 ・ 2歳児：水道をずっと出している。押して出す手洗い用の石けんを、ずっと押して出している。 ・ 水系が好き（水遊び、ひたすら手を洗う、お盆を石けんで洗う、水をびしゃっとかける）。 ・ 蛇口を指で押さえて、水をびゅっと飛ばして遊ぶ。 ・ 園庭にじょうろで水をまく。 ・ トイレの水を何回も流す。 ・ 3.8歳-4歳児：水洗トイレで、トイレトペーパーを便器のところまで引っ張ってきて、水につけたまま水を流して、クルクルクル（トイレトペーパーが「カラカラ」なるのを見て楽しんでいった）。 ・ 小さい子：先生の机に油性ペンでお絵かき。 ・ 2・3歳児：ポポちゃん（人形）や床に落書きをする。 ・ 3・4歳児：ポポちゃん（人形）の体にマーカーで落書きをしていた。 ・ 2・3歳児：絵本に落書きをしていた。 ・ 年少児：それがいけないことか分からなくて、違うところに落書きをする。 ・ 4歳児：取っけはいけないネジを外そうとする。興味津々。 ・ 健康帳をちぎって破ろうとする。 ・ 大掃除の時に様々なものが出てくる（天袋や明かり取りのロフトの中にちょこんと隠してある、ハンカチやブロックなど）。ハムスターみたいな感じ。こういうところに「置いた」という感じかもしれない。 ・ 玩具を窓に投げる。 ・ 3歳児、5歳児：イスの座るところの棒の間（横の側面）に足をつっこんで、そして抜けなくなった。 	<p>新任 新任</p> <p>新任 中・ベ 新任 中・ベ 新任 新任 新任 新任 新任 新任 新任 新任 新任 新任 中・ベ</p> <p>新任 中・ベ 中・ベ 中・ベ 中・ベ 中・ベ 新任 中・ベ</p> <p>新任 新任</p>
「対生物」のいたずらの内容	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 3・4歳児：植物（ミニトマト）をもいで食べる（青いときにはとらずに、赤くなってからもいで食べる）。上の子は、大切に育てようと教えているから（大切に育てるという意識があるから）、勝手にもいで食べるということはない。 ・ 3歳児：鳥小屋の金網に粘土を押しつけて、うにうに〜と押し出す。それをインコが食べようとした。 ・ 3歳児（4月とかはじまったばかりの頃）：鳩のえさに小石が似ていると思ったらしく、「餌だ、餌だ」と言いながら、石を「バーン」と小屋にぶつけていた。なぜ、鳩に石を投げたのかを聞いてみると、「えさ、あげよったんよ」という答えが返ってきた。今では、その子は、メダカのことを心配したり（死んだメダカを可哀想としたり）、生き物に対する思いやりを持つ子になっているらしい。 ・ 5歳児：藤棚に鳩が巣をかけていた。「触っちゃダメ、そっとしておこう」と言っていたのに、触って、「卵と雛」を全部落としてしまった。そして、卵と雛は全部死んでしまった。 ・ 木の上に作った鳥小屋を棒でつつく。 	<p>新任</p> <p>新任</p> <p>新任</p> <p>中・ベ 中・ベ</p>

(次のページへ続く)

Table B 「保育者が仕掛けるいたずら」の具体例1 (新任=新任保育者, 中・ベ=中堅・ベテラン保育者)

分類1	分類2	保育者が仕掛けるいたずらの内容	報告者
対人	わざと	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの興味をそそるような話し方をする (ニュアンスの違う言い方をする, おもしろおかしくする)。 ・0-1歳児:靴をはくときには,履けないのが分かっている,自分ですのをずっと見ている。「どうするのかな,この子」。泣く子もいるが,自分で履こうとする子,やってやってと言ってくる子と様々。 ・叱ったあと,もう許しているのに怒った表情のまま子どもを見つめる。 ・ピアノのところに誰かを出す場合に,フェイントをかける。 ・箸でご飯を食べている子にフォークを持って行く。 ・手を洗うときに,水を「ジャー」っと出す。そして「あー,ごめん,ごめん」。 ・ピアノ伴奏では,「おやつ」のときに,はじめは違う曲を弾き,後でおやつ 	新任 新任 新任 中・ベ 中・ベ 中・ベ 中・ベ 中・ベ 中・ベ
	じゃれる	<ul style="list-style-type: none"> ・脇腹をついたり,こちょこちょしたりする。 ・帽子を下げる。 ・食べているときは,食べるのが嫌なら…「あーん」,すーっとひく。 ・くすぐる ・ピクニックごっこ (シートを広げてお弁当を食べる)をしていて,片付けるときに,子どもたちが布にしがみついてきたので,2,3人ずつシートに乗せてひっぱって走って遊んだ。 ・コミュニケーションの一環で,くすぐる。 ・怪獣になって,おへそを食べに行く。 ・追いかけて,たまに追いつかないときに…「何かついているよ」,近づいて,ぱっ,みたいな。何回かは通じない。「ウソでしょう?」って言われる。年少児も年長児も,何回かは通じる。 ・ちゃん,と体をつついて知らんぷりをする。 ・服を着ているときに袖が通っていない状態で,ぶらんぶらんしている腕を後ろで結ぶ。そして,「大丈夫?大丈夫?」。 ・昼寝の時に,毛布を山盛りにする。途中で,「どんな?」,「どんな?」,「重たい?」,「重たい?」。子どもは,じたばたしているが,そのうち寝る。 	新任 新任 新任 新任 中・ベ 中・ベ 中・ベ 中・ベ 中・ベ 中・ベ
	不思議	<ul style="list-style-type: none"> ・隠れる。 ・登園の時に,部屋のどこかに隠れていて,いきなりバーンと出てきて「おはよう!!!」(何歳児に対しても)。 ・保育室を空っぽにする ・隠れていて急に出てくる。 ・怖いもの(お化けとか)を持ち出す(なってみせる)。 ・子どもの興味をあおる。山への散歩で,薄暗くて気味悪い場所に保育者が作った恐竜の卵を置いておく。遊びのきっかけ,ある意味での導入(保育者のいたずら心)。 ・ごっこ遊びのときなどは,架空のものを連れてきて,驚かせる。たとえば,カップパのときには,かじられたキュウリを置いとく(カップがかじったように見せかける)。 	新任 新任 中・ベ 中・ベ 中・ベ 中・ベ 中・ベ
怖い		<ul style="list-style-type: none"> ・蜂が部屋に入ってきて騒いでいたら,「(刺されるから)静かにしとくんよ!!!」。子どもたちは「し〜ん」。子どもたちが静かになるので,騒がしいときには,わざと「蜂が入ってきたー!!!」と言う。 ・2-3歳:蜂が多い時期に,「蜂が来たらしゃがんで,先生にも教えてねー」。その後,しばらくして,何もないうちに…「蜂だー!!!」…子どもたちはみんなしゃがんだ。 	新任 新任
		<ul style="list-style-type: none"> ・節分の時に「鬼が来るよ!!!」,「悪い子は鬼山に連れて行くよ」,「お行儀が悪いと鬼が来るからね」と言ったりする。 ・節分の時に,鬼の面をつけているんなかつらをかぶって,カーテンの陰から昼寝のところをずっとのぞく。 ・3歳:ハロウィンのときに,園長先生が「恐竜の足」をつけていたら子どもが泣いた。担任の先生も,もう一度同じことをして子どもを泣かす。面白いから連 	新任 中・ベ 新任

(次のページへ続く)

分類1	分類2	保育者が仕掛けるいたずらの内容	報告者
対人	怖い	<p>続して。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3歳：子どもたちの中には、カブトムシの幼虫が怖い子がいる。怖いけれど横まで見に来る。子どもが「いやだー」といっているのに、「ほらほら～」。他の先生が子どもを押さえてそうすることも。虫が怖い子どもを虫かごに入れようとする。子どもは、他の先生に「〇〇先生がやったー」といたずらをした先生を指さす。 ・急に大きな音を出す。 	<p>新任</p> <p>中・ベ</p>
対持ち物	わざと	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが「お菓子を開けてください」と持ってきたときに、3歳以上の場合、ちょっとだけ蓋を開けてあげる（全部は開けない）。 ・ゼリーのふたを「あけて」と持ってきた子に、実習生がわざと食べたふりをしたら、子どもが大泣きした。 ・ご飯を食べない子に、わざと「先生が食べるよ!」。子どもは、「嫌だー!」、口を開ける。 ・パジャマを着るのに時間がかかり過ぎる場合には、午睡の時間に布団を敷かなかつたり、パジャマを片付けたりする。 	<p>新任</p> <p>新任</p> <p>新任</p> <p>中・ベ</p>
	不思議	<ul style="list-style-type: none"> ・年少児：「ゼリーをあけてください」と子どもが持ってきたときに、食べたふりして、口を舌でふくらませて、「美味しい!!」（後で、ちゃんと出す）。みんな（子どもたちは）、それが当たり前になっている。「あっ!」、やってもらったという感じ。 ・年少児：子どもたちが、粘土のお団子を持ってきて…隠して、食べたふりをして、ごっくんもする。子どもたちは、「先生本当に食べよう」とびっくりする。もちろん後で、ちゃんと出す。みんなが何回もやって、やってとくる。そして、そのうちに、「先生すごいんだよ」という噂が広がった。もともと、年長児には、通じない。直ぐに、「口あけて、口あけて」と言ってくる。また、年長児には、2回目やったら通じない。 	<p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p>
対物	不思議	<ul style="list-style-type: none"> ・壁面に関しては「ふきだし」をつける。「キノコさんが書いたんやない～」。 ・劇の大道具を部屋の真ん中に置いておいて…子どもがなぜ部屋の真ん中にあるのかを聞いてきたら…「先生がやったんじゃないよ。妖精さんがやったんかも」, 「小人さんが持ってきたんやない～」などと言って面白がらせる。 ・マジック的な遊び：ペットボトルのふたの部分に絵の具を着けておき、「振ってみて」と言って子どもに振らせる。すると、色が出てくる。 	<p>新任</p> <p>新任</p> <p>中・ベ</p>
なし	なし	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者としては、いたずらをしかけることはありません。 	<p>中・ベ</p>

Table C 「年齢によっていたずらにはどんな特徴がありますか？」の具体例¹⁾

いたずらから見る子どもの発達の内容	報告者
<ul style="list-style-type: none"> ・年少児：分からないまま行く。床にマジックで書いてしまう。絵の具を紙以外の他の所に塗ってしまう。 ・年中児：知っていてする(分、タチが悪い)。 ・年長児：友達と相談して行く。単独犯もいるが、2人でこそそ話合って仲間と一緒にいたずらをする。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・年少のいたずらは、かわいい ・年長児は、本当にいけないことはいたずらとしてしない。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・年齢が低ければ低いほど、いたずらをして(身体に)傷がつく。ひっかいたり、かみついたりするから。 ・3・4歳：自分のわがままです ・年長児は賢いいたずらが多い。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・0歳：いたずらという感じがしない。0-1歳は、遊びの延長。 ・2-3歳：分かってやっているような感じ。 ・4-5歳：驚かせようとする。質的に違う。 ・年少児はどこでもする(見えるところでもする)。 ・年長児は目に見えないところである(もっとも、後でバレるが…)。 	新任
<ul style="list-style-type: none"> ・年少児は興味本位でいたずらを行う(やったら怒られるということが必ずしも分かってはいない)。 ・年中児は、ある程度、分かってやっている。だが、いたずらか悪ふざけかは微妙。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・年長児はいたずらが高度になる。「悪いかな」と思いつつも相手(友達や保育者)をびつくりさせようとする。年中児は、いたずらの高度さという点においては、年少児と年長児の間。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・幼いほど、よく分かっている。年を重ねると「意図」や「根拠」が出てくる(年中児担任)。 ・3歳児：先生のを悪気なく「隠す」。「困っているよ」というと出す。5歳児：「みんなが探している」というと、最後に出す。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・高度ないたずらは、年長児が多い。 ・年少児のいたずらは、ほのぼのとしている。癒されるいたずら。 ・年中児と年長児は、体も頭も使ったいたずら。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・いたずらの質(レベル)は、年齢によって違う：年長児ほどジョークがわかるので、いたずらの内容が面白い(2歳児はその時のジョークが分かっていない)。落とし穴などは工夫している。お化けもそれなりに工夫している。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・年少児は、その場の興味や思いつきです。 ・年長児は、こうしたら、こうなるだろうという見通しをもってする。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・年少児は、他愛ない思いつきの行動が多い。たとえば、飼育観察をしている小動物をつまみ出して、もてあそんだり、水道の栓をあけて歩いたりするなど。 ・年中児は、茶目っ気のある、ちょっと人を困らせるようないたずらをする。たとえば、友達の自由画帳にいたずら書きをしたり、絵を描いたり、など。 ・年長児は、いろいろな仕掛けを工夫して相手を困らせる(どうすれば相手が困るか、物の隠し場所など)。また、ウィットに富んだ行為を考える。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・年少児：思いつき&単独 ・年中児：考えて単独 ・年長児：知的・よく練っている&複数(少数だと規模が小さくなる)。 	中・ベ
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの方から仕掛けてくるのは、年長児から。巧みなテクニックを伴って。また、年長児は理由をつけるのが上手、それらしい答えを返す。 	中・ベ

¹⁾Table 6 に記載されていない結果である。新任=新任保育者、中・ベ=中堅・ベテラン保育者である。1つのセルは、同じ回答(インタビューを行った場所は同じ)ということを示している。

Table D 「子どものいたずら心を活用した保育」の具体例

	子どものいたずら心を活用した保育の内容	報告者
保育者が捉え方を変える	<ul style="list-style-type: none"> ・冒険心を持つことも時には大切なので、それがいい意味で広がって遊びに発展するとよい。 ・「好奇心」と置き換えることができれば、全ての保育に活用可能（4歳児担任）。 ・いかにイメージを膨らませるかという点では、保育には全ていたずらの要素が含まれている（避難訓練で、わざと焦がしたものを持ってくる、「匂い」のエッセンスをつける場合も）。 ・物事や事象に関して興味・関心を持つことにつながればよい。 ・日々、そう（日々、いたずらを伝授している）。楽しいことをいっぱいしてほしい。 ・私（保育者）がやっているのを見て真似をして、こんな工夫をしよう！！工夫ができていた時は、工夫を認めてそして誉めてあげる。 ・人を驚かせる楽しさへとつなげる。年長児では、マジックや手品など。 ・いろんなことをイメージしながらやっていると思うから発想力の育成へとつながると思う。 	<p>中・ベ</p> <p>中・ベ 中・ベ</p> <p>中・ベ 中・ベ 中・ベ</p> <p>中・ベ 中・ベ</p>
発散	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもやってはいけないと言われていたことを自由にさせてあげる保育。 ・子どもがやりたいことを満足いくまでできるような環境を用意する。 ・落書きの場合は、思う存分書ける遊びをする（マーカーを使った遊び）。 ・水、泥、砂遊び（子どもたちが好きなことをさせる） ・ボディ・ペインティング ・帳面（出席簿）にシールを貼るいたずらの場合は、時々、別のものに貼らせてあげる。 ・健康帳をちぎって破ろうとするいたずらの場合は、新聞紙や広告を使った保育をしている時に、最後にちぎって遊んだりする。 ・年少児：普段は、自由帳にお絵かきをしている。大きいところ（壁や床）に書いてみたいのかなあと感じる場合は、ボディ・ペインティングなど。 ・普段は、お洋服が水に濡れたりしてはダメといている。ただし、今だけは、びっしょんこ、砂まみれになっていいよ、と砂遊びの日を作る（心を解放する）。 	<p>新任 中・ベ 中・ベ</p> <p>新任 新任 新任 新任</p> <p>新任</p> <p>新任</p>
遊びにもついでいく	<ul style="list-style-type: none"> ・網戸から逃げる子は追っかけて、追いかけっこごっこにする。 ・2歳：遠足ごっこの時に布シートを使って。片づけるときに、子どもが乗ると、ジェットコースターみたいに、シュー、シューと左右に（先生が乗ると、投げ捨てられるが...）。 ・スリッパ隠しの場合は、違うものに替えて、宝探し遊びをする（ものを替えれば遊びになる）。 ・ごっこあそび、ファンタジーなど。 ・ちょっとしたゲーム（たとえば、布が一枚あったら、お姫様、マント、ターバンへ変身）。 	<p>新任 新任</p> <p>新任</p> <p>中・ベ 中・ベ</p>
設定保育への取り入れ	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちから生まれた遊びを取り入れる。 ・もっとうちでみたいという好奇心を、遊びの中に取り入れる。 ・楽しいなと思ったことは、劇的なものの中で一緒に表現して楽しんでいきたい（年少組担任）。 ・劇に取り入れる。たとえば、劇の中に、いたずらな魔法使いが登場し、「どんないたずらしたい?」。子どもは、「ウサギになる!!!」と答えたらしい。 ・じゃれあい保育（子どもとじゃれる）。あるいは、先生と子どもが戦ったり、など。 	<p>中・ベ 中・ベ 中・ベ</p> <p>中・ベ</p> <p>中・ベ</p>
指導の機会	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の手ホルダーのチェーンを隠して、どこにやってしまったか分からなくなってしまり返すことができなくなった。隠された方だけでなく、隠した方も泣いてしまった。友達のことを隠したら、相手はどう思うか、自分はどう思うかを指導する。 ・そのいたずらを取り上げて、「やったらいけんよ」と注意を促す。 ・子どもが生き物（アリ、トンボ、蛾、カエル [足を持ってから]、カナブン）をカップの中で（プールだといって）泳がせていた。その場合は、命の大切さを教える。 ・周りの人の気持ちやものを傷つけてしまうことなどを考えるきっかけになる。 	<p>新任 新任</p> <p>中・ベ</p>
自らを見直す機会	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもにいたずらをして、私（保育者）が危ない箇所気づいたりすることがある。 ・忘れていたことを思い出すきっかけにする。 ・急にいたずらをする子がいたら、「何かのサイン」だと思う。 	<p>新任 新任 中・ベ</p>
一緒に考える	<ul style="list-style-type: none"> ・あえてきちんと用意をせずに、どうするかあとという感じで見る。たとえば、何かを書いてほしくて紙を置く。こちらは何か書いてほしいけれど、子どもはそれをちぎったりする。 ・これをしたらどうなるんだろうということを、子どもと一緒に探ってみる(2歳児担任)。 	<p>新任</p> <p>中・ベ</p>
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがやったことを、こっちが逆に真似をする。 ・話を聞かないときは、「帰ってこんでいい、外に出なさい、外に行っちゃってきて!」。 ・あまり考えたことがない。 ・保育にはいたずら心を奨励することはないように思います。 	<p>新任 新任</p> <p>中・ベ 中・ベ</p>